

区の伝統を守りながら交流も盛ん

〈小那覇区〉

小那覇区は平成六年に道ジュネーを含む大綱曳きを三十六年ぶりに復活させた。最近では若い人がエイサーに取り組みなど意欲的に活動している区ですが、その取り組み方を新川自治会長にお聞きしました。

小那覇にもいろいろな伝統芸能、年中行事があります。

平成六年に三十六年ぶりに復活した大綱曳きは、かつて七年ごとにおこなわれていて、道ジュネーの素晴らしさは「スネー美らさや小那覇村」と詠まれるほどでした。しかし、道ジュネーが一九五八年を最後に途絶えてからは、毎年、小規模の大綱曳きを続けていました。



新川勝夫 小那覇区自治会長

それが、平成五年の西原まつりで旗頭や太鼓などをそろえて道ジュネーしたところ、区民百二十人ほどが参加し、これを契機に区民の結束が高まり「ぜひ続けよう」との声があがったことが復活に弾みをつけました。



平成6年に36年ぶりに復活した小那覇の大綱曳き

獅子舞は子ども若獅子もあって小学校四年生くらいから練習させています。子ども若獅子隊といって地元の新年会や敬老会で披露したり、守礼の里や敬愛園などにお年寄りの慰問に行ったりしています。小学校を終えると若獅子も卒業です。私は各部落に若獅子があつてほしいと思います。子どもたちが自然に伝統文化に馴染みますから。

西原東小学校に若獅子が二頭寄付されましたが、小那覇から舞いかたの指導に行っています。子どもたちが興味をもつ

綱曳き

綱曳きは、もともと五穀豊稔を祈願し、集落の人々が暮らす元気で働くようにお祈りする催しであると言われています。また、古来の話では、火玉返しの際、とももの言われていました。いずれにしても、集落の繁栄と共同の精神を養い、親睦を図るの目的のようです。

以前、西原平野は沖縄でも有数の米作地。明治四十年頃まで米作が続き、そのため、首里などの綱造りには、ワラの提供をさせられました。綱曳きの相分は雄雄別との相み合わせは「上東、南前、古島」が雄雄で、「下、西北、後、新島」が雄雄で、「ミジナ」、「ミーンナ」と呼ぶ等々。と云うが我輩では雄雄を「リンゴ」、「雌雄を「ワフカー」と呼びます。安室、桃原も同じ呼称だったといえます。

綱造りはワラを適当に束ね、三人の男連が一組になって校綱を造ります。この校綱をまとめて輪にし、綱の本体にします。それに校綱をつけてカチマチをつけて、綱は出来上がりとなります。綱造りは雄雄の頭部が雌雄の頭部の輪の中にはいるようにすれば完了です。(参照・西原町史、西原町の文化史)

我謝の綱曳き

西原で綱曳きといえは、四〇〇年の伝統を誇るといわれる我謝の綱曳きが有名ですが、我謝綱の由来については他の綱曳きの由来とは違った言い伝えがあります。

大昔、我謝の根屋である上神座家に二人の兄弟がいました。その当時、我謝一帯の田畑はすべて神座屋の所有地でした。兄弟は我謝を二分し、兄は「リンゴ」と、弟は「ワフカー」として農作業を競い合いました。兄弟はそれぞれに自分の与が勝つていて互いに譲りませんでした。兄が「作柄の良い薬で作った綱は強いはずだ。収穫後の薬で大きな綱を作り、二手に分かれて綱を引き合い勝負を決めよう」と言っていて、リンゴとワフカーとで綱引きを行つことになりました。この綱引きが、その後、我謝部落全体を二分する大綱曳きに発展したといわれています。我謝の綱曳きが、リンゴ・ワフカーで組み分けられているのは、こうした由来があります。(「西原町史」参照)



400年の伝統を誇る我謝の綱曳き



ナジナタ(長辺)、シタク(支度)と続く道ジュネー

てくれたらいいですね。やはり遊び心もないと子どもたちや若い人は、ついてこないですから。

獅子舞などは、是非、長老や大先輩のみなさんにも一緒に指導してほしいですね。やはり、今の若い人たちが夜中まで練習で一生懸命やっているので、まず、ほめてやってほしいんです。そのあとアドバイスをしてやれば、またがんばるんじゃないでしょうか。まあ、農家が多かった昔とちがって、今はサラリーマンの人が多いいから何かと忙しいこともあって参加が少なめになってはいますが、今の若い人でも地域を思う気持ちは強いんですよ。

綱引きの時間に行う旗頭の練習は一カ月前くらいからやりますが、最初は人もまばらですね。いままでの経験でのんきにかまえているところがあるので、「早くおいでよ」と声をかけます。徐々に集まってくるので、本番前は衣装が足りない、道

具が足りないとなる。やはり人集め、資金集めは大変ではあります。

エイサーは青年四人が私のところにエイサーをやらせてくれと来たんですよ。小那覇の青年は一人で、あとは他の部落の子だった。彼らとしては、まずは小那覇に聞いてみようという気持ちだったのではないのでしょうか。それで「青年会活動の一環としてやってみたらいいんじゃないか」と話したわけです。

今、小那覇のエイサーには他部落からも青年が集まってくる。西原だけでなく与那原町からも来る。小那覇以外の青年も受け入れるのは、彼らが自分の地域に帰って指導者になれるから。それぞれの地元で帰って自分たちもやってみようと思う。私も他区との集まりでは習いにきていいよと呼びかけしています。今、エイサーをやっている小那覇、兼久、内間団地は青年同士の交流もあり、お互いに刺激を受け合っているようです。